

屋久島の集落における民俗文化の映像教材化

学校名	鹿児島県立屋久島高等学校
所在地	〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦2479-1
学級数	9
児童・生徒数	281名
職員数/会員数	33名
学校長	野口 剛
研究代表者	永田 聖史
ホームページ アドレス	http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/yakushima/top.htm



1. はじめに

本校は県内で唯一、普通科に環境コースが設置されており、巡検を重視する活動を行ってきた。しかし、屋久島の地勢や気候の問題が大きく、実施にあたって困難な場面が多かったことから巡検内容を事前に映像化する旨の助成申請を行った。けれども、研究の初期の段階で行われた「くるま座ディスカッション」にて「本校での取り組みがいかにか他校で広がりをもてるか（研究の一般性）」を問われ、部活動や生徒の課題研究に軸足を移した案へと変更を行った。また、県の財政状況の悪化に伴う、学校予算の縮小は本校が県内でも小規模であることから拍車がかかり、視聴覚教育の充実は望むことのできない状況もあった。今回の助成を受けたことで、放送部の活動の活発化（九州放送コンテスト進出）、活動した生徒の進路開拓（推薦入試の合格）、担当教諭の研究深化（映像コンテスト参加、専門誌掲載）、地域貢献活動（制作した映像が地域のネットワークで放映）など、多くの成果をあげることができた。小規模校であったからこそ、生徒と教員の活動が地域と結びついたことで「学校活性化」へと繋がったと考える。本校のような中央から離れた小規模校で、視聴覚教育の実践を通じた「学校活性化」のスキーム作りを実現したことに他校に通じる一般的な意義があると思う。

2. 研究の目的

先述した環境コースの巡検においては天候が崩れると予定した授業内容を実施できない問題を抱えていた。地勢的に島をまたぐような道路がないために、簡単には生徒に見せるこ

とができない場所や行事も多かった。そのため、映像で記録して番組を制作することで、いつでも授業や巡検の代替授業に活用できるように「民俗文化」を中心とした番組づくりを提案させていただいた。世界自然遺産に登録後は、様々な科学番組が屋久島をテーマに制作されており、社会的内容を扱う番組が不足していたことも一因である。

映像の番組を制作するために撮影機材や編集の技術など、機器的なことに目を奪われがちであるが、取材や番組構成を考える時にはより深く内容を理解しておく必要がある。今回のプロジェクトでは、研究する生徒達と番組を制作する生徒達の交流にも重点をおいた。各自に応じた成果物をもたらせる工夫も行ったが、それらの成果にも影響があると考えた。

また、制作した映像を巡検の現場でも効果的に活用することを目的として付加した。ipadをはじめとする小型端末が話題となっていたこともあるが、実習現場において映像を含めた様々なデータを紹介する授業展開が可能になったと思ったからだ。



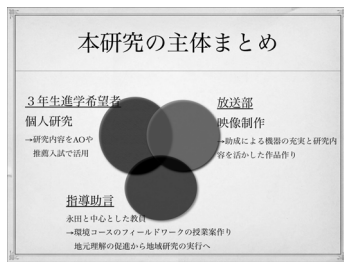
＜屋久杉自然館で行われた撮影の様子＞

3. 研究の方法（基本的な経過も含めて）

まず、「屋久島の民俗文化」の研究班の生徒を組織した。計画当初は環境コースの生徒に活動をさせる予定もあったが、3年生の進学コースの生徒の希望者で始めることとなった。

いずれも「食文化」「住居」「地域創成」と、屋久島の民俗文化と関連性の高い分野の大学や短大を進路に選択した生徒達である。

映像制作班は放送部の2年生を中心にお願いした。研究班の3年生の1名に対して1～2名の2年生をつけ、さらにそれぞれを1～3の3つの班に分けて取材時や映像制作の企画構成段階を共同で作業を行った。以下が班分けである。



- ① 1班：地産地消関連／屋久島茶
- ② 2班：生活家庭関連／古民家
- ③ 3班：町起こし関連／中間の里のエコツアー。

活動は1学期から夏休みまでが研究班中心で、現場での撮影や取材の共同作業は夏休みに実施した。2学期以降は放送部と3年生の研究班がそれぞれ独立した作業を続けて映像作品やレポート（原稿用紙20枚程度）を作成した。教員は、研究班の取材やレポート指導、映像制作班の撮影や編集にあわせて機材等を揃えて活動を支援することに追われていたが、12月から1月にかけて校内研究発表の資料作りや準備が本格的に始まった。生徒のレポートや映像も活用して1月末の環境コースの巡検の授業案を考えて実施した。

3学期に入ると1～3班の映像制作のまとめと3つの作品を統合した「屋久島の魅力 再発見！」と題した6分程度のガイド的な作品作りを行った。鹿児島島の港や空港を繋ぐテレビネットワークの会社のご好意もあり、放送される目処もたったことから、本校のOBを中心とした技術講習会（アナウンスや映像編集）を開いた上で番組制作を進めた。一定の映像作品としてのレベルを超える必要もあり、2月の連休の3日間にも及んだ講習会は体力的にも厳しいものとなった。現在、4月からの放送に向けて、ネットワークの会社と最後の調整を行っている。



4. 研究の内容

1～3班までの映像研究テーマ毎の班分けではなく、先記の図で示した「本研究の主体まとめ」の枠組みで記したいと思う。

(1) 研究班（3年進学希望者／個人研究／生徒3名）

特に4月～6月にかけては文献調査に追われた。校内や地域の資料館の行きき必要な資料を収集した。機材を揃えることに手間取ったこともあるが、屋久島は公共交通機関の運行も少なく、現地調査に出向くことが出来なかったことも大き

い。結局、夏休みの長期休暇まで待たねばならなかった。研究費の活用については、中間地区の里のエコツアーの取材で参加資料費が発生したこととビデオカメラとデジタルカメラを活用



<研究班の現地取材の様子(茶業)>

できた。放送部の生徒と組ませたことで、取材中に写真や映像を撮る手間が大幅に削減されてインタビューなどに集中できたことは大きな利点となった。また、まとめたレポートを、AO・推薦入試の添付資料とした。本研究のらしさが表れたのが、教育学部を志望した一人の生徒がICT教育専攻で出願したことだろう。本来は放送部が制作予定であった茶業に関する映像を、パイロット版としていち早くまとめたことからその意欲の高さが伺える。試制作した映像の一部を活用して試験で問われるプレゼンテーション内容を組んで受験したことから、本研究を最も活用した生徒ともいえるだろう。

(2) 映像制作班（放送部2年生）

機材がそろわず、顧問の機材を主として運営していたような部活動であったので、今後の活動に大きな不安を抱えていた。そのような状況の中でパソコン本体やカメラなどの機材を導入できたことは大きな進歩となった。技術的に活用できる機材が増えたことはもちろんだが、特に写真の精度が上がったことによって、映像と映像との間を橋渡しのように使うカットの使い方が変わり、作品の作り方で大きな変化があったことは予想外の変化であった。また、映像作品を制作する際には文献調査を含めた取材活動を行うのだが、今回のプロジェクトの研究班のように細かく調べ上げることは少ない。作品構成を行う前の取材活動は負担にもなるため、本校のような少人数の部活動では活動の停滞にも繋がりがかねない。しかし、今回は研究班が一緒になって取材や撮影が行えたことから、新しい発想や得意分野を活かすことに繋がったようだ。

また、研究費に講師招聘の為の移動費を含んでおいたことも活動を活発化できた理由の一つだ。特に本校は離島であるが故に指導を受ける機会が少ない。本校のOBを含んでいたこともあり、旅費のみで協力をいただいて大きな成果を得られたと思う。特にアナウンスの指導と脚本の手直し、高度な映像ソフトの編集については講師なくしてはできなかったと感じている。



<講習会での編集指導の様子>

(3) 教員の動き

高校生とはいえ、研究班や映像制作班の指導は頻繁に必要であった。最終的に映像になるかの違いはあるが、取材後に構成を考えて表現していく過程は同じであり、特に視点を変

えるような場合は教員の指摘が大事になる場面が多かったように思う。しかし、教員独自の活動という点では、環境合宿中の巡検を伴う授業案作りだと言えよう。今回のプロジェクトとの関連から、



＜巡検中の iPad による説明と映像上映＞

生徒が行った「屋久島の茶業」と永田（地理担当）が行った「屋久島の電力」に関する内容を授業化した。1コマの座学による導入授業と3時間近くの巡検を指導し、特に現場での説明を iPad で行う実践にこだわった。コース生が6名と少なかったが、画面のサイズから考えて1台で共有するには苦しかった。また、iPad で示すファイルと紙の資料で配布するものでは区別をつけるべきであった。巡検における iPad の使い方については、それのみで一つの研究課題になりうる大きな事項だと感じた。

5. 研究の経過

当初の計画と比較すると、「くるま座ディスカッション」後に「研究の一般性」を追求して追加・変更を行ったことが大きな転換点であった。このことによって、各研究班を3年生の進路と結びつけたこと、各研究班毎に終わっていた映像制作を一本化して地域に還元すること、巡検時に iPad を導入して制作した映像や図をより効果的に活用することなどが変更された。もう一つ、経過の中で特筆すべきなのは講師の招聘だと思う。放送部の映像制作は部活動としての活動とスケジュールの調整がつかず（コンクールでの九州大会進出のため）、全体的に作業が遅れていた。講師を招聘することでアナウンスや編集において細かい指導が行き渡ると、生徒達も具体的に取組むべきことが理解できるようだった。結果的に制作した作品だけでなく、活動に様々な広がりを持てるようになったということだろう。また、教員側も生徒との活動を通してより地域の課題に取組む機会が増えた。生徒の研究班の活動補助だけでなく、教員単独で電力に関する地域研究に取組んだことが巡検時に実施した授業に活かされることとなった。

6. 研究の成果と今後の課題

今回の研究目的としては地域に関する3つの映像作品が完成したことでほぼ達成できた。しかし、今回のプロジェクトが間接的な影響力は大きく多岐にわたる。凡その内容を下記にまとめた。

主体別	本研究における主な取り組み	研究に関連した成果や結果
研究班	「茶業」「古民家」「里のエコツアー」に関する3つのレポートを作成。映像制作班との連携。	長崎大学教育学部、鹿児島県立短期大学生生活科学科、都留文科大学社会科学部地域創造専攻に合格した。
映像制作班	上記の3つのテーマに基づいた映像制作。映像制作機器の取り扱い。	本研究で導入した機材を用いて制作した「The god of forest」が第32回九州高校放送コンテスト熊本大会に進出。
教員	環境合宿の巡検時の授業作成。 地域研究にも取組む。	アメリカ地理教育学会主催ビデオコンテスト参加。月刊地理3月号に「屋久島の電力」共著で掲載。
全体	1～3班までの映像を統合して「屋久島の魅力再発見！」の番組を制作	(株)エアポート TV ネットワークジャパンの協力を得て、ポートヴィジョンにて4月～6月まで放映の予定。

今回の取り組みのスキームは完成しているものの、小規模校であるが故に進学の受験者や放送部の部員数などの少人数の変動が枠組み自体にも大きな影響を与える恐れはある。来年度、クラス数が1減になるなどの不安要因もあるので、入学生徒数の減少を最小限にとどめることが活動継続の鍵になると考える。

7. おわりに

大規模校であれば校務や部活動単位で実施したプロジェクトであったと思うが、本校ではそれらが単体では運営できなかった。そのため、各部署が協力して「屋久島の民俗文化の映像作り」を軸にして「学校活性化」にも繋がる活動に広がった。本研究に対してパナソニック教育財団の果たした役割は大きく、視聴覚教育の関連予算が全国的に削減されている状況の中、本校と同じような小規模校にとって一つの希望になり得ると思う。長期にわたりサポートいただいた関係者の皆様と財団にお礼を申し上げたい。